



東京部会(第109回)

日時:	2019年5月14日(木) 19:30-21:30
場所:	慶応義塾大学三田キャンパス研究棟 446号会議室
参加者:	[順不同・敬称略] 篠原、塙、鈴木、藤牧、杉田、中山、杉浦、黒岩、升野、鈴木、中村、新井の12名

1 19年夏休み経済教室の準備をおこなった。

(1) 鈴木深氏(東京証券取引所)から、教室のチラシが紹介された。案内は、5月下旬から9000箇所へ送付、6月3日をめどに受付開始とのことである。また、研究団体などでチラシが必要な場合は、連絡していただきたいとのことである。

(2) 夏の教室の発表準備の状況の確認を行なった。

- ・東京、大阪部会で、発表内容のブラッシュアップをすすめている。それに関して、資料として大阪部会の記録(ネットワークHPにアップ済み)が配布され、大阪での進捗状況が篠原代表から紹介された。
- ・東京部会では、前回、鍋島、西崎氏のレポートが紹介、検討されている。また、annex寺子屋(東京部会有志の勉強会)でも、山城高校の下村先生が参加されて、入試問題関連の検討が進んでいることが紹介された。
- ・今後、発表者との連絡、情報共有を通して準備をすすめてゆくことが確認された。また、講演者の読売新聞山崎氏との打ち合わせなども予定されていることが報告された。

2 実践報告・教材提案関係

(1) 参加者からの報告と検討

① 黒岩公輔先生(都立立川国際中等教育学校)からの報告があった。

- ・黒岩先生は、夏の経済教室での入試問題の発表者である。当日報告予定の新テストの試行問題(国と地方自治体に関する正答率が極めて低かった問題)に関する勤務校での生徒の解答状況、生徒の感想、生徒がこの問題から必要と感じる学習内容の詳細なアンケート結果が報告された。
- ・対象としたプレテスト問題の正答率は30%強、センター利用予定者、社会科授業への選好度の高い者に関しても30%強でほとんど変わらないという結果であった。ただ、センター利用かつ社会科好きという生徒が34%の正答率ということで、多少の変化がある程度であったとのことである。
- ・生徒のアンケートでは、タダの暗記だけではダメ、社会に目を向けていないので良く分からなかったという感想の一方で、習っていないが答えを出すことができたとの感想もあったとのこと。
- ・これからの学習では、なぜ?と問いかけることが総合的な学習につながる、一方的な授業スタイルではなくゼミナール型が必要など、授業改善へのヒントとなる回答も紹介された。
- ・今後、プレテスト問題をベースとした、地方自治、地域経済に関する授業プランを実践して、夏の教室発表準備に備えるとのことである。

② 塙枝里子先生(都立農業高校)「労働の経済学」の授業プランの検討が行なわれた。

- ・夏の経済教室で発表予定の労働、職業選択に関する授業プランのなかの「椅子取りゲーム」に関する概要の紹介と検討が行なわれた。



・検討では、現在の労働市場の状況は、絶対数が足りなかったり余ったりしている状況ではなく、年齢や産業によるミスマッチが問題となっているので、数だけではなく質までを問題にするゲームを考えられないかとの指摘や、そこから労働の何を教えるのかを明確にした問いが必要になるのではないかという指摘が篠原代表および参加者から寄せられた。

・それに対して、発問部分をジグソー法でやってみるなどの授業形態を工夫することで、労働が同質でない状況、新しい状況への対応などを考えさせる展開なども考えたいとの回答があり、近く予定されている実践を踏まえた授業提案の準備をすすめることになった。

③杉浦光紀先生（都立井草高校）から「掃除当番から考えるゲーム理論と環境・財政問題」の授業プランが紹介された。

・この授業は、環境問題の授業に引き続いて構想され、実際の授業では、公害問題、外部不経済とその内部化、環境税や排出権取引の授業を行なったとのことである。

・今回の授業プランは、教室の掃除を巡るシナリオから、誰も掃除をしなくなってしまう「囚人のジレンマ」状況を発見させ、ジレンマを抜け出す方法を考えさせてゆくものである。さらに、自分の教室だけでなく、3年生が使った教室を掃除するかというシナリオから、世代間のライフポートジレンマを導き、そこから財政問題と持続可能性に広げるというプランを持っているという。

・検討では、篠原代表（エコノミスト）から以下のような指摘があった。掃除当番の「囚人のジレンマ」ゲームでは、参加者全員が例外なく「教室の掃除をしないと耐え難い状況になってしまう、だから掃除はした方がよいに決まっている」という同じ効用関数をもつことを前提にしている。もし「掃除なしで教室が汚くてもかまわない、掃除なんかしないでその間、外で遊ぶ方がよい」と思う生徒がいた場合、ここで想定した利得表の得点の構造が変わってしまう。そこで、ここでは「皆で協力して～する方がよい」ことを教えるのか、それとも一般に高校教員が理解している「囚人のモデル」を教えるのか、原点に戻って、何を教えるのか、という問題を検討してみたいか。もし教える目的が前者であれば、協力・非協力の結果を単純に金銭の多寡で比較できる「中川モデル」のようなモデル展開の方が高い教育効果が期待できるのではないか、という指摘であった。

・それをうけて、今後さらに検討を加え、ゲーム理論がどこまで使えるか、シナリオの手直しなどをおこなってゆくとの回答があった。

④岸香おり先生（ICU高校）から提起された信用創造に関する質問が紹介された。

・岸先生が本日は欠席されたので、次回以降に内容の確認と検討を行なうことになった。

3 今回の部会

・夏の教室の準備と、発表内容の検討が行なわれ、今回も充実した会議となった。黒岩報告や杉浦プランのような実践を踏まえてのデータや新しい授業プランが提出され、検討され、共有されるルートを広げる課題を感じさせる部会でもあった。

（記録と文責：新井）

次回の開催予定、2019年6月18日（火）19:00～21:00。会場は慶應義塾大学三田キャンパス内会議室。